

第4節 大窪大工の役割

石川県七尾市、中能登町の県境に位置し、富山県西北部の氷見市を拠点に活動した大窪大工に関する研究論文は多数あり、藩政期時代における大工の系譜や作事の実態はすでに明らかになっている部分が多い。したがって、ここでは多くの研究成果をもとに大窪大工について概観し、彼らの果たした役割について述べる。

氷見市の北端、石動山の東側の山麓に戸津宮、長坂、宇波という地区がある。ここはかつて大窪村と呼ばれ、大窪大工と呼ばれた宮大工集団が居住した中心的な地区であった。大窪大工とは、この大窪村に住んだ大工のことを指してこう呼んだ。彼等は天正15年(1587)以来三百数十年間、ここを拠点に今日に至っても大工職人として活動を続けている。

そもそも大窪大工は、加賀藩祖前田利家に召し抱えられて尾張国からやって来た大工たちであった。天正11年(1583)前田氏は能登を治めていた畠山氏と戦いを繰り返していた。この戦いで畠山氏と結託した石動山山頂付近にあった天平寺は、戦火により三百余りあった寺坊のほとんどを焼失してしまった。しかし、二代藩主前田利長の援助により、天平寺伽藍復興が開始されることとなった。この復興事業に携わるためお抱え大工であった

大窪大工の先祖16人に、屋敷地を与えて住まわせたのが大窪村なのである。表4-2は16人の大窪大工の祖の名前と拝領地の名称、子孫の名前を示した一覧である。

16人の大工たちが住んだ大窪村は、平坦な土地が極めて少ない山間の地域で、棚田状に開墾された田畑が点在する有様である。現在でも生活していくには厳しい地域であることから考えて、近世初期の暮らしぶりの困難さは想像するに余りある。そうした厳しい生活環境のもと天平寺復興事業に邁進できたのは、お抱え大工として自負と使命感、そして伝統的技術を洗練させ磨き上げてきた威信といった精神的支柱があったことに他ならない。

江戸中期にあたる享保8年(1723)になると、当初大工の16人から22人(棟梁大工4人、仕手大工=御屋敷持18人)に増えたという。しかし、人数が増えた分、拝領地が増えたわけではなく、分家が増えて拝領地を分割して賄っていたという。

江戸末期の大窪大工の人数状況は、安政6年(1859)史料によると棟梁大工4人、仕手大工18人、帳面大工61人、帳外大工21人が存在したという。

これより先に、弘化元年(1844)「八代庄大窪大工組」という大工仲間の組織が結成されている。この組織は大窪大工をはじめ大窪村周辺の大工を含めた組織であって、安政期

表4-2 先祖名と居住地名一覧

	名前	居住地名	子孫名		名前	居住地名	子孫名
①	三郎右衛門	大窪	高橋寛平	⑨	四郎兵衛	大窪	藤岡嘉章
②	二郎左衛門	大窪	高田秀雄	⑩	与十郎	宇波	藤林豊治
③	宗兵衛	大窪	石上 悟	⑪	藤三郎	大窪	中口太助
④	善左衛門	長坂	窪 重信	⑫	藤次郎	長坂	長谷川清重
⑤	太左衛門	宇波	沢田忠幸	⑬	与三五郎	大窪	森 博明
⑥	源左衛門	宇波	森 市松	⑭	宗四郎	大窪	中川清一
⑦	七右衛門	長坂	山本信一	⑮	宗二郎	大窪	高森英俊
⑧	弥右衛門	長坂	赤坂秀次	⑯	佐藤七	大窪	高井昭二

本表は『氷見市史1通史編一』に基づいて作成した。ここで扱う大窪村とは、大窪、長坂、宇波の三村を総称した地域を指す。

まで持続していたことにより大幅な人数になったと思われる。

大工人数が多いということは、その分作事量を増やさないといけないことを指している。すなわち、活動範囲を広げていかないといけないのである。その活動範囲を拡大していた証として、五箇山・能登での活動事例がある。

五箇山では、社寺建築は言うまでもなく、合掌造りの民家を手掛けていた。例えば、小瀬地区の羽馬家住宅（文化11年、1814移築、県文）、上梨地区の円浄寺（旧上梨道場、弘化3年、1846）、岐阜白川村大戸家住宅（国重文、天保4年）が挙げられる。つまり、一種の出稼ぎで、社寺建築にこだわるのではなく、住宅系建築も手がけることにより活動地域を広げていたことになる。加えて作事内容の幅も拡大していったことになる。これにより地域の建築文化の広がりや建築技術の改革へと繋がっていったことが言える。

続いて、能登での事例を挙げると幕末・明治期となるが、2枚の棟札がある。ひとつは大窪出身の棟梁大工・高橋久平きゅうへいの名が記された白山社拝殿（七尾市中島町小牧）の棟札であり、もう1枚は菅忍比咩神社本殿（七尾市中島町笠師）の棟札である。

白山社拝殿再建の棟札（明治24年、1891、写真4-56、4-57）をみると、「建仁寺流藤岡左衛門恭福門弟 棟梁大窪村高橋久平」、小牧村の「棟梁若木太蔵」、裏面に「脇棟梁長坂村伊勢菊平」、小牧村の「若木與太松」と記され、続いて「下大工土川村樋口宇三郎」と小牧村の「北二市」、同村出身の「木挽棟梁花木伊之助」らの名がみえる。

白山社棟札

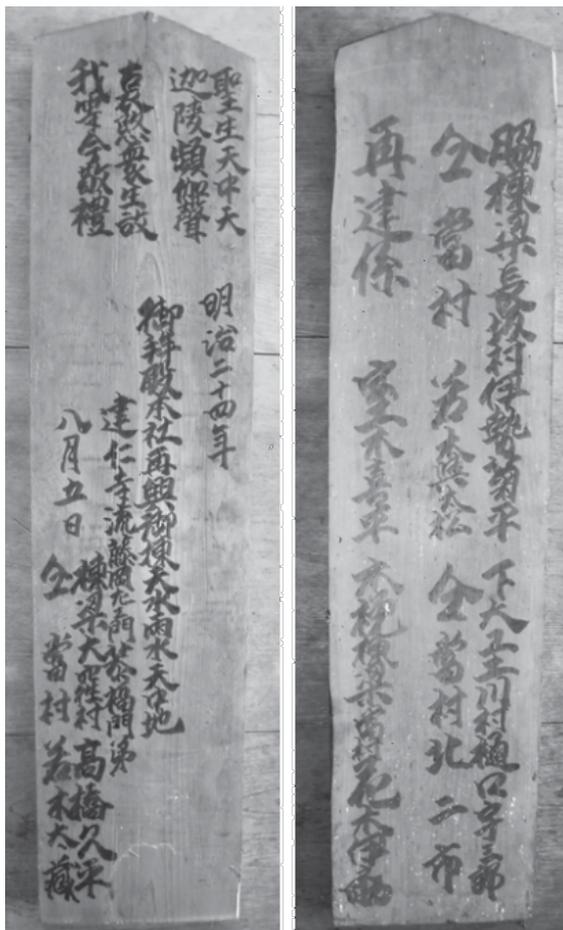


写真4-56 白山社棟札表 写真4-57 白山社棟札裏

下大工樋口、同北、木挽花木ら3名の出身・土川村と小牧村は、現在の七尾市中島町土川地区と小牧地区のことである。したがって、大窪大工のもとで地元の大工が付いて作事を行っていたことを示している。

一方、菅忍比咩神社本殿再建の棟札（弘化4年、1847年、写真4-58、4-59）には、「後立藤岡嘉兵衛 棟梁三上傳蔵」（裏面）と記されている。「後立藤岡嘉兵衛」とは、大窪大工の藤岡家のことで、「棟梁三上傳蔵」は地元笠師村の出身大工のことを指す。藤岡嘉兵衛と三上傳蔵は師弟関係にあったと考えられる。ちなみに、同社の別棟札に藤岡系大工と地元三上系大工の名を連ねたものが存在する。

菅忍比咩神社棟札



写真4-58 菅忍比咩神社棟札表 写真4-59 菅忍比咩神社棟札裏

以上のように、能登での事例としては建築年代や建造物は異なるものの大窪大工と地元大工の関わりは密接で、作事の主体は自分（大窪大工）たちであるが、仕事を独占するのではなく地元大工と協働で行うことで、大工技術の修得と経済的還元（人夫賃）などの直接的な支援（役割）を果たしている。また、地元で活動している弟子の大工に対して、親方の名を使わずことで間接的な支援と大窪大工が保持する大工技術の質保証（信頼性）を高めるにも一役買うことになったとも言える。

換言すれば、大窪大工たちは単に能登で社寺建築を手掛けたという実績だけを積んだ訳ではなく、地元の大工と協働し、あるいは弟子への間接的支援により、大工技術の質の高さと信頼を獲得していったものと考えられ

る。

こうした大窪大工たちが他所での信頼性のある活動により、大窪大工というブランドを築き、同時代に活躍した仲間や後裔の大工たちに与えた影響は大きい。現在でも能登で活動ができていることをみれば明らかである。その意味で大窪大工たちの果たした役割は大きかったと言えよう。

第5節 能登・加賀における大窪大工の動向

第1項 室木家と大窪大工・高橋家

明治中期に初代高橋久平が室木家の普請に関わったことは、ナカノマ天井裏の小屋組材に附された墨書（明治18年）から疑いない。しかし、高橋久平がどのような経緯によって室木家普請を行ったかは不明である。

室木家のある七尾市中島外地区では高橋久平の作例はないが、周辺域で室木家の普請が終わった時期に数例存在する。室木家より南へ1.5kmに位置する小牧地区では、小牧白山神社拝殿があり、棟札から高橋久平の作であることが知られている。建築年は明治24年（1891）である。（写真4-60）



写真4-60 小牧白山神社拝殿

また、中島町中島の中心地に位置する真宗大谷派蓮浄寺鐘楼は明治34年（1901）、同寺本堂は大正10年（1921）である。（写真4-61）

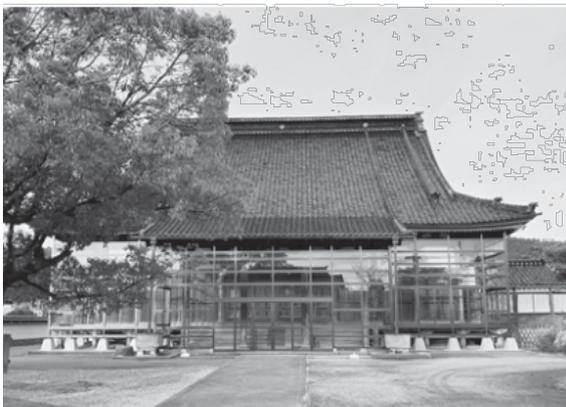


写真4-61 蓮浄寺本堂

加えて、室木家から北へ1kmほどの田岸地区の七尾北湾の海岸線に真宗大谷派常光寺本堂も高橋久平の作事であると伝えられている。大正9年から昭和初期（1920代）の完成という。（写真4-62）

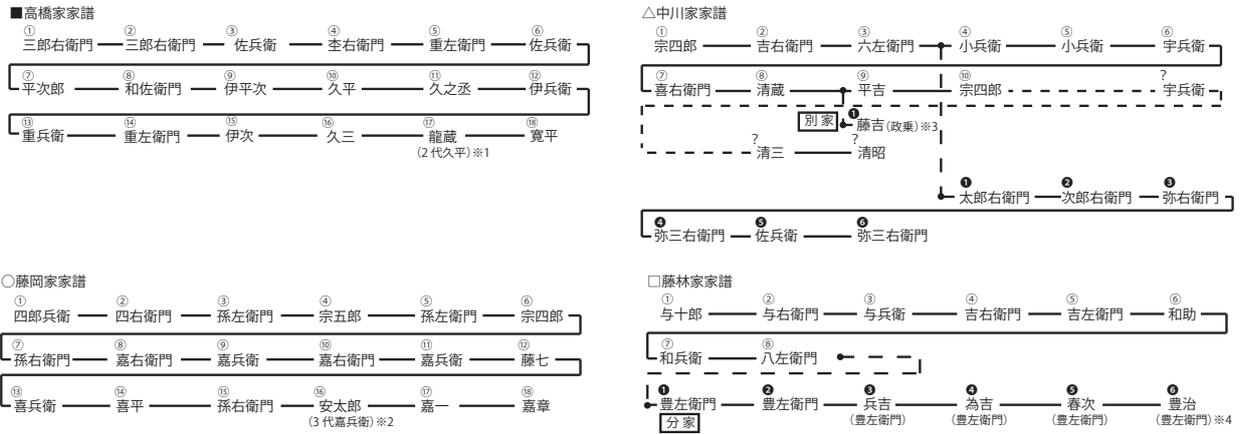


写真4-62 常光寺本堂

このように室木家からは若干距離のある近隣地区に作例が多いことから推察して、能登の名家として名高い室木家の実績を買われて、本業の宮大工としての腕をふるっていたことが窺い知れる。

室木家の菩提寺である七尾市中島町土川地区の真宗大谷派忍性寺は、裏付けはとれていないが、大窪大工の作事と伝えられている。ちなみに本堂は明治42年頃（1909）といい、鐘楼、山門は本堂より早く明治30年前後（1890代）頃という。

また、室木家の七尾市中島町外からかなり離れている輪島市門前町劔地の真宗大谷派光琳寺本堂は、明治44年（1911）頃から普請が始まっていたことが、同寺に残る普請文書で明らかとなり、棟梁大工を務めていたのは高橋久平である。ちなみに、明治27年（1894）に室木家の長女彌栄が同寺に嫁いでおり、それが縁で大窪大工・高橋久平へ作事依頼がなされたものと考えられる。



※1：婿入り後の名跡継承、 ※2：安太郎が3代嘉兵衛を若い頃から名乗った、 ※3：清蔵の次男で金沢・山本家婿入りするも後に中川姓を名乗る、 ※4：本家は明治期断絶、分家：豊左衛門が名跡継承し、以降代々豊左衛門を名乗る。

図4-11 四家の家譜図



図4-12 石川県内の大窪大工の作事活動実績図

表4-3 大窪大工(高橋、藤岡、中川、藤林家)の作事活動実績

年代(和暦・西暦)	高橋家	藤岡家	大工名	史料	藤岡家	大工名	史料	中川家	別家・在籍・史料	藤林家	大工名	史料
文化10年	光西寺本堂(氷見市)	高橋重左衛門吉矩	高橋重左衛門吉矩	③	西念寺本堂(氷見市)	藤岡嘉兵衛	⑥					
文政4年								【東派本願寺金沢別院】	中川政乗	⑧		
天保8年												
天保13年					乘願寺本堂(氷見市)	藤岡嘉兵衛	⑥					
弘化元年								【西派本願寺金沢別院】	中川政乗	⑧		
嘉永5年								【石川郡笠間村宮拝殿】	中川政乗	⑧		
安政4年								【金沢西派光教寺御堂】	中川政乗	⑧		
安政6年								【羽喰郡今濱村本社拝殿】	中川政乗	⑧		
万延元年								【今濱村光西寺御堂】	中川政乗	⑧		
万延2年								【金沢西派西勝寺御堂】	中川政乗	⑧		
文久2年								【東派本願寺金沢別院御堂・式台座敷】	中川政乗	⑧		
文久3年								【石川郡本吉宮本社】	中川政乗	⑧		
慶応元年								【金沢西派照圓寺御堂】	中川政乗	⑧		
慶応元年								【金沢東派光尊寺御堂】	中川政乗	⑧		
慶応2年								【石川郡鶴来村市宮拝殿】	中川政乗	⑧		
慶応3年								【金沢東派仰西寺御堂】	中川政乗	⑧		
明治3年								【金沢禅宗宝圓寺】	中川政乗	⑧		
明治5年								【金沢安江神社拝殿】	中川政乗	⑧		
明治8年								【石川郡本吉宮拝殿】	中川政乗	⑧		
明治10年	【能登州神和住真念寺】	※		①								
明治10年	【石動山寶池院中式臺】	※		①				【金沢尾崎神社移築】	中川政乗	⑧		
明治11年												
明治13年												
明治14年	【鳳至郡鹿波邑妙覚寺本堂】	※		①	乗念寺本堂(中能登町能登部)	藤岡嘉兵衛・菅平	⑦					
明治18年	旧室木家住宅(七尾市中島町)	高橋久平/墨書										
明治23年												
明治23年	鶴来別院本堂(白山市鶴来町)	藤原安貞/板図										
明治24年	白山社拝殿(七尾市中島町小牧)	高橋久平		①								
明治25年	【石川郡鶴来町別院蓮台虹梁後面】	※		①								
明治26年					安誓寺本堂(志賀町高浜)	藤岡嘉兵衛	了					
明治29年	宇波神社拝殿(氷見市)	高橋重左衛門		⑤								
明治32年					光徳寺本堂(七尾市)	藤岡嘉兵衛	了					
明治30年代					長賢寺本堂(中能登町二宮)	藤岡安太郎	了					
明治34年												
明治34年	蓮浄寺鐘樓(七尾市中島町)	高橋		了								
明治34年					願成寺本堂(中能登町久江)	藤岡安太郎	了					
明治35年					西光寺本堂(七尾市)	藤岡嘉兵衛(安太郎)	了					
明治37年	【石川郡松任正光寺】	高橋久平		①								
明治39年	長坂神社拝殿(氷見市)	高橋重左衛門(藤原安貞)		④								
明治40年	【石川郡曾谷村拝殿】	※		①								
明治44年	林幽寺(金沢市弥生)	藤原安貞/板図										
明治44年	光琳寺(輪島市門前町鏡地)	高橋久平		②								
大正8年	【金澤八坂町鶴林寺】	高橋		①								
大正9年-昭和初期	常光寺本堂(七尾市中島町)	高橋久平		了								
大正10年	蓮浄寺本堂(七尾市中島町)	高橋久平		了								

表4-3 大窪大工(高橋、藤岡、中川、藤林家)の作事活動実績(続)

年代(和暦・西暦)	高橋家	大工名	史料	藤岡家	大工名	史料	△中川家	別家(在金山・史料)	藤林家	大工名	史料
大正11年	1922【金澤市寺町実成寺】※	高橋久平	①						□藤林家		
大正12年	1923【石川縣鶴来町金剣神社】	高橋久平	①								
大正12年	1923【東本願寺別院山門】	高橋久平	①								
大正13年	1924【熊野村草木浄因寺庫裏式台】※										
大正15年	1926【金沢市三社福雷町貳徳寺本堂】※										
昭和2年	1927【金沢神社】※										
昭和2年	1927【愛宕社本殿(氷見市)】	高橋久平(安貞)	①								
昭和3年	1928【金澤大乘議国禪寺座禅堂】※										
昭和8年	1933【金沢西養寺山門】	高橋工務所	①								
昭和9年	1934【石川縣穴水町長谷部神社】	高橋工務所設計部	①								
昭和22年	1947										
昭和23年	1948			長賢寺鐘楼(中能登町二宮)	藤岡嘉一	ア					
昭和27年	1952			養泉寺本堂(七尾市)	藤岡嘉一	ア					
昭和28年	1953	高橋龍造(高橋久平)	③	養泉寺鐘楼(七尾市)	藤岡嘉一	ア					
昭和30年	1955			西光寺鐘楼(七尾市)	藤岡嘉一	ア					
昭和57年	1982			願成寺鐘楼(中能登町久江)	藤岡嘉章	ヒ					
昭和61年	1986			光願寺鐘楼(七尾市能登島町)	藤岡嘉章	ヒ					
不明		※	①	伝流寺本堂(中能登町井田)	藤岡安太郎	ヒ	浄安寺(宝達志水町今浜)	(中川本家)	⑨	光宗寺本堂【羽咋福永】	※
不明		※	①	徳照寺本堂(中能登町高島)	藤岡安太郎	ヒ	光西寺(宝達志水町今浜)	(中川本家)	⑨	伊須流岐比古神社本殿・拜殿(中能登町石動山)	※
不明		※	①	正覚寺本堂(七尾市中島町)	藤岡安太郎	ヒ	【羽咋郡米出村拜殿】	(中川本家)	⑨	蓮浄寺【鹿島郡中嶋村】	高橋と協働
不明		高橋久平	①	正圓寺本堂(輪島市三井町)	藤岡嘉一	ヒ	妙万寺(七尾市)	(中川本家)	⑨	機橋神社拜殿(石川郡月橋)	※
不明							恵光寺(志賀町領家)	(中川本家)	⑨	天満宮拜殿【鹿島郡中嶋村】	※

関西

文政11年 - 天保6年	1828-35						東本願寺再建(京都市)	中川清藏	⑨
昭和6年	1931	【大阪市福島説教所本堂】	①						
昭和7年	1932	【大阪市円勝寺本堂】	①						
昭和10年	1935	【大本教京都別院大拜殿】	①						

※各家の作事であるが、大工名が明確でないことを示す。また文書史料からの各家で間違いないが、年代が明らかでないものを不明とした。

※【】内の建物名、所在地名は文書資料の原文を記入した。

※この表は各家にあった文書や当該社寺の棟札、聞き取り調査を基に作成した。表中に氷見市での社寺建築が含まれているのは、同じ名前前の大工が登場するも活躍した時代が異なっていることを示すためである。

※年代は建造物の竣工年代を表すものではない。

※史料欄は以下の文献等である。

- ①【高橋家文書】氷見市立博物館蔵
- ②【光琳寺文書】真宗大谷派光琳寺蔵
- ③【東旭山 光西寺誌】1972年
- ④【平成八～十二年度 氷見市神社調査報告書】2002年
- ⑤【弘源寺本堂図面と大窪大工】(『越中二上山と国泰寺』)1994年
- ⑥【平成五・六年度 氷見市寺社調査報告書 真宗大谷派の部】1995年
- ⑦【中能登町能登部下 乗念寺文書目録】2018
- ⑧ 迎四三雄「加賀宮大工の祖「大窪大工」に就て(一)」(『石川郷土史学会誌』)1978年
- ⑨ 「大窪大工 一神明講と中川家文書から一」(『氷見の手仕事』)2011年
- ア 寺院アンケート調査結果
- ヒ ヒアリング調査結果

表4-4 氷見大窪大工に関する寺院建築等アンケート調査結果一覧

	寺院名	宗派	住職名	住所	本堂			
					建築年代	大工名 (棟梁)	大工 出身地	普請に関する事項
1	光徳寺	浄土真宗本願寺派	富樫敬典	七尾市馬出町35	明治32年11月	藤岡嘉兵衛	氷見・大窪	明治27、28年の七尾の大火で本堂、庫裏などすべて焼失
2	西光寺	浄土宗	高僧英淳	七尾市小島町ハ148	明治35年再建	藤岡嘉兵衛	氷見・大窪	棟札板あり。裏堂内に立てかけてある。
3	養泉寺	真宗大谷派	藤原彰玄	七尾市石崎町ラ162	昭和23年	藤岡嘉一	氷見・大窪	
4	長賢寺	真宗大谷派	長澤隆司	鹿島郡中能登町二宮口90		藤岡安太郎	氷見市 戸津宮	1853年ペリーが浦賀に来航した年にも宮の大火にあり、その後建立したと聞いている
5	願成寺	浄土真宗本願寺派	藤田樹水	鹿島郡中能登町久江へ部56	明治34年	藤岡安太郎	氷見・大窪	特になし
6	忍性寺	真宗大谷派	藤永 忍	七尾市中島町土川7-57	明治42年頃	不明	富山県	火災による再建で「再建日誌」等により再建年代はほぼ分かるが、大工名は不明だが室木邸(忍性寺門徒)と大窪大工との関りから、大窪大工によって普請された可能性が高い。
7	蓮浄寺	真宗大谷派	江尻晃邦	七尾市中島町中島ハ59甲	大正10年	高橋(久平)	氷見・大窪	安政4年4月大火後、仮本堂を建てる。この頃、計画されていたと思われる本堂の立体総図画がある。氷見大窪大工の名前あり。また、これとは別に、現在の本堂と思われる板図が後堂にある。
8	常光寺	真宗大谷派	西岸正映	七尾市中島町田岸ハ49	大正9年 ～昭和初期	高橋久平		
9	浄厳寺	真宗大谷派	藤彦祐秀	羽咋郡志賀町火打谷ナ42	大正初期	赤坂	志賀町	大正初期建立 資材門信徒のこん志による
10	安誓寺	東本願寺派	竹内教昭	羽咋郡志賀町高浜町レ143	明治26年	藤岡嘉兵衛	氷見・大窪	棟札に願主、棟梁名記載。平面図は本堂内に掲示
11	光琳寺	真宗大谷派	木越祐馨	輪島市門前町劔地	明治40年	高橋久平	氷見・大窪	普請文書

寺院名	鐘楼				山門				普請にまつわる伝承等
	建築年代	大工名 (棟梁)	大工 出身地	普請に関する事項	建築年代	大工名 (棟梁)	大工 出身地	普請に関する事項	
光徳寺	昭和22年 8月		高岡	戦争で鐘は提供された。 戦後新しくした。	昭和9年 頃	柴田真次 茶谷	田鶴浜 七尾市松 本町	昭和49年頃建てられた。 市役所で調査されてい る。	
西光寺	昭和30年	藤岡嘉一	氷見・ 大窪	昭和30年、鐘釣が初代宮 崎寒稚作 総ケヤキづくりの立派 な建造物 設計図保存なれど未だ 判明せず探せば出てく るや	昭和49年 改修	藤岡嘉章	氷見・ 大窪	平成19年の能登半島地 震により山門少々傾き 損傷すれど改修し現在 に至る。	氷見の大窪の藤岡嘉章 様宅にお尋ねすれば詳 細な資料等があるかと 存じます。 現在も交流、取引、継続 せり
養泉寺	昭和27年	藤岡嘉一			なし				本堂の材木の運搬中、一 本杉の仙対橋の橋げた が折れる事故や、木の下 になって大怪我をした 人もあったと聞いてい ます。
長賢寺	昭和21年 昭和22年 落成	藤岡嘉一	氷見・ 大窪	戸津宮は石動山の裏側 ですが泊まりこみで大 工仕事をしたそうです					
願成寺	昭和57年	藤岡嘉章	氷見・ 大窪	特になし	不明				
忍性寺	明治30年 前後と 推定	不明	不明	鐘楼門形式の建築物で、 明治中頃、当時の坊守 で、眼科医をしていた人 が寄進したもの。 大窪大工による普請か どうかは不明	明治30年 前後と推 定				本堂普請に関して、門徒 のある方は、父親からの 聞き伝えとして、大工の 名前に「タカハシ」とい う人がいたと言っていた
蓮浄寺	明治34年	高橋	氷見・ 大窪	鐘は、戦争で供出し戦後、 昭和23年に新たに鐘造	昭和37年	高橋文七	氷見大窪	昭和38年完成	当寺の建物は、高橋大工 が世代をこえて携わっ ていただいたと伝えら れている。
常光寺									
浄厳寺	なし			本堂前にありましたが、 朽ちたため昭和40年中 ごろ壊した。同鐘は、戦 時に供出したそうです。	なし				
安誓寺	不詳 (昭和25年頃)	不詳		大東亜戦争後 書類等が不明の為 (H19震災の為)	昭和45年				
光琳寺									



写真4-63 光琳寺本堂

以上のことから大窪大工高橋家は、七尾市中島地区で多くの作事を行っていたことがわかった（表4-3及び図4-12）。

氷見市立博物館所蔵の高橋家文書⁽¹⁾からも明治初期から能登地方での活動の一端が垣間見られる。例えば、能登町神和住の真念寺の虹梁に付ける絵様の図柄（図4-13）や「石動山寶池院中式臺桁隠し」（中能登町石

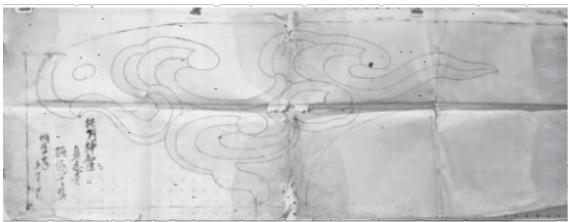


図4-13 真念寺絵様



図4-14 石動山寶池院絵図

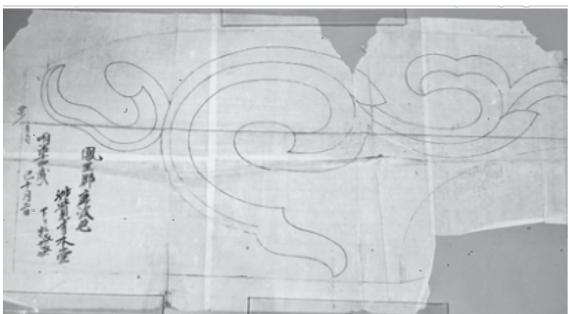


図4-15 妙覚寺絵様

動山・図4-14)の図である。いずれも明治10年(1877)頃に作図したものである。図4-15は明治14年(1881)の妙覚寺本堂(穴水町鹿波)の絵様の図である。

高橋家が本拠にしていた越中大窪村(現在の富山県氷見市戸津宮地区)は、能登方面と地理的に近く、石動山の峠を越えれば行き来できるという地の利を活かして活動領域を伸ばしていたことは明白であるが、同家の文書を丹念にみると加賀方面でも活動していたことがわかる。現在の白山市鶴来町に建つ真宗大谷派鶴来別院普請に関わる図面がたくさんみられ、年代が明確ではないが高橋久平の名が入った鐘楼の青焼き図面(図4-16、作成年不明)がある。年代が明確なものとしては、明治23年(1890)の「柵脇間虹梁用ル」と題した図も含まれている。

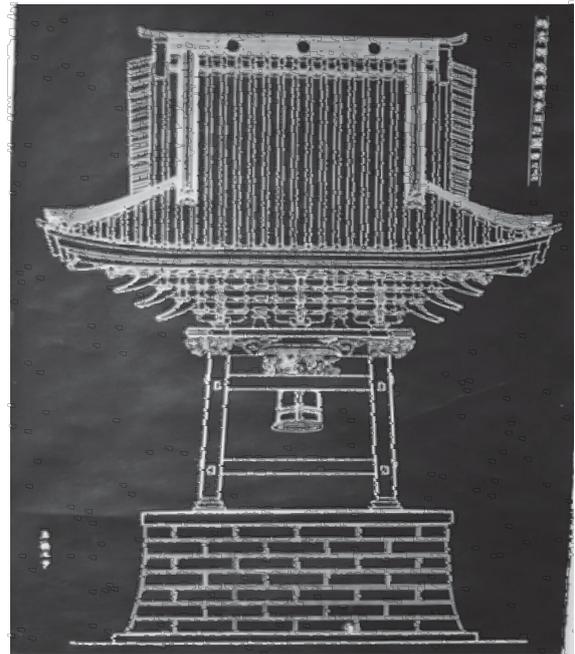


図4-16 鶴来別院鐘楼堂正面図

これまで鶴来別院本堂(写真4-64)は、同寺に残る板図から明治23年建築、大工は「藤原安貞」とされていた。しかしながら、藤原安貞の出自は明らかでなかった。



写真4-64 鶴来別院本堂

ところが、地元大窪村長坂の長坂神社拝殿（明治39年建築）は、二代高橋重左衛門の作であることは早くから知れており、高橋家文書に長坂神社拝殿の平面図（図4-17）が含まれ、その裏面に三手先の組物図が描かれ、端に「藤原安貞」の落款が押されている。（図4-18）

このことから鶴来別院本堂の大工「藤原安貞」は、高橋重左衛門である可能性が高まった。少なくとも同家の文書から高橋家系譜（図4-11）⁽²⁾に繋がる人物が関わっていたことが言える。

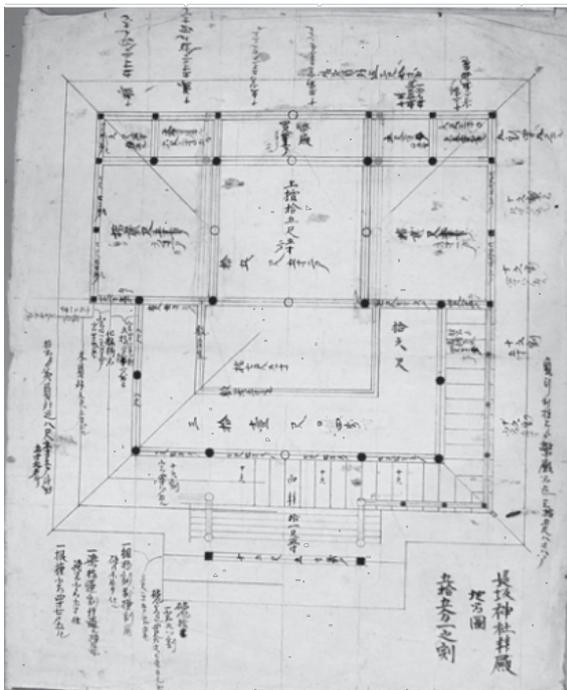


図4-17 長坂神社拝殿平面図

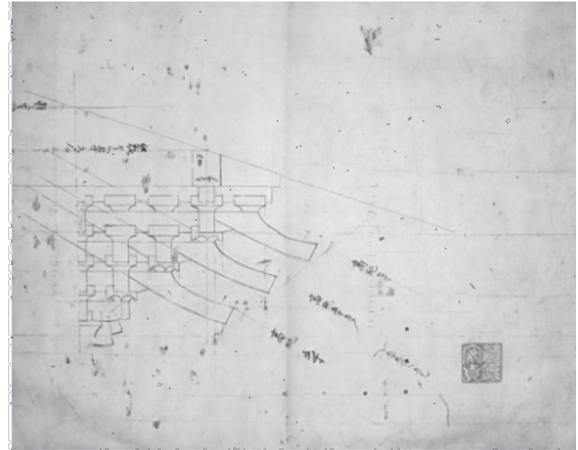


図4-18 長坂神社拝殿図(裏面)藤原安貞落款

次に第十七代目の瀧造は同家に婿入りした人物で、二代高橋久平を名乗っていたという。高橋家に限らず大窪大工の家系では、宮大工としての実績が浅く跡目を継いだ人物や婿入りした人物は、祖先の名前を名乗ることが慣例としてあったという。

二代久平（瀧造）は初代久平と同様、能登・加賀（金沢）や関西での活動がみられる。二代久平が活躍した時期は、昭和初期頃からと思われる。特に金沢、関西での作事が目立つ。ただし、同家の文書から高橋久平という個人名だけでなく、「高橋工務所」名の入った図面が多く残る。昭和9年（1934）の年号が入った長谷部神社（穴水町）の本殿、社務所等の図（図4-19）が挙げられる。同社の賽銭箱の内側に「高橋組」と書かれた墨書も発見されている。

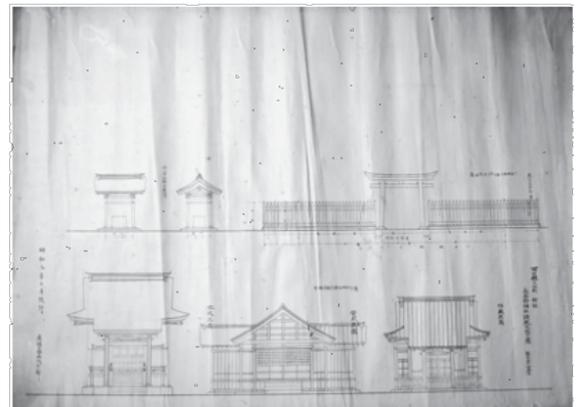


図4-19 長谷部神社立面図

このことから昭和初期の大窪大工高橋家は、組織化した事業所として経営が行われていたものと考えられる。そして、昭和戦後、第十八代目寛平の時になってから宮大工を廃業した。

第2項 大窪大工・藤岡家の動向

藤岡家系譜(図4-11)は先の高橋家と同様、大窪村戸津宮に居を構えて宮大工として代々従事し、現当主嘉章氏まで継続する唯一の大窪大工である。その祖は四郎兵衛に始まり、第十二代藤七までの系譜は先行研究によって明らかとなっている。しかし、同家の石川県内における作事例は発見されておらず、鹿島郡能登部の浄土真宗本願寺派乗念寺本堂(写真4-65)の普請までまたねばならない。同寺に残る「乗念寺本文書」から普請が始まったのは、明治13年(1880)からで「乗念寺本堂大工人数帳等」に大窪大工藤岡喜兵衛の名が登場する。さらに同じ大工人数帳の明治15年、16年に喜平の名が記されている。この文書にある「喜兵衛」と「喜平」との関係は詳らかではないが、親子の可能性が高い。ここでは喜兵衛を第十三代、喜平を十四代として扱った。本堂の普請は明治16年内に終え、同33年(1900)本堂上段の天井を張って一区切りとなったようである。乗念寺の普請にあたり、門徒である中島和彦家を定宿としていたことが同家に伝えられている。そして工事が完了すると引き続き、同家の普請を行ったという。



写真4-65 乗念寺本堂

次に、第十五代孫右衛門の作事例は見られなかったが、明治19年(1886)「大窪大工顕彰碑」が建立され、その建立者筆頭に藤岡孫右衛門が登場し、そのあとに高橋重左衛門ら11人の名が刻まれている⁽³⁾。

作例から見た場合、藤岡家が能登地方で寺院の普請を多く手掛けるようになるのは、第十六代嘉兵衛からである。羽咋郡志賀町高浜の真宗東本願寺派安誓寺本堂で、建築年代は明治26年(1893)である。安誓寺を皮切りに、七尾市の中心市街地にある浄土真宗本願寺派光徳寺本堂(明治32年、1899)、同じく中心市街地に位置した浄土宗西光寺本堂(明治35年、1902)が挙げられる。

この第十六代嘉兵衛は藤岡家当主嘉章氏の祖父にあたる「安太郎」のことで、若くして家督を継いだことにより、同家の威厳を高めるため先祖第十一代嘉兵衛を名乗っていたという。中能登町二宮の真宗大谷派長賢寺本堂(明治30年代、写真4-66)、中能登町久江の浄土真宗本願寺派願成寺本堂(明治34年、1901、写真4-67)も代表作である



写真4-66 長賢寺本堂



写真4-67 願成寺本堂

第十七代嘉一は嘉兵衛の関わった長賢寺、西光寺の鐘楼など昭和戦後の建物を担当し、七尾・真宗大谷派養泉寺本堂（昭和23年、1948）、鐘楼（昭和24年）を建てている。

また、現当主の藤岡嘉章氏の作事として先の願成寺の鐘楼（昭和57年、1982、写真4-68）や能登島町浄土真宗本願寺派光顕寺鐘楼（昭和61年）などがある。



写真4-68 願成寺の鐘楼

藤岡家の明治以降の諸作をみてきたが、高橋家とその足跡は大きく異なり、加賀方面での活動は皆無で、能登方面、特に中能登町二宮、同久江、同井田、同高畠など現在の中能登町石動山系の麓集落の寺院が多いことがわかる。

これは先の高橋家と同様、藤岡家の拠点である旧大窪村（氷見市戸津宮）は地理的にみて中能登町が真裏にあたり地の利を活かしての活動であったこと、それに加えて先祖たち

の功績が認められ、後裔に任せられるほどの信頼を勝ち取っていたためと思われる。

第3項 大窪大工・中川家の動向

中川家は前田利長から居屋敷を扶持された16名の大工のひとりで、同家に残る多数の文書が氷見市立博物館に寄託されている。これら文書の一部に「大窪大工系圖之一卷」（図4-20）から中川家系譜（図4-11）は初代宗四郎から第十代宗四郎（二代）まで明らかである。しかし、二代宗四郎以降から中川清昭氏までは明らかでない。また、第三代兵六左衛門の子太郎右衛門から分家し、第六代弥三右衛門まで続いたがその後は不明である。

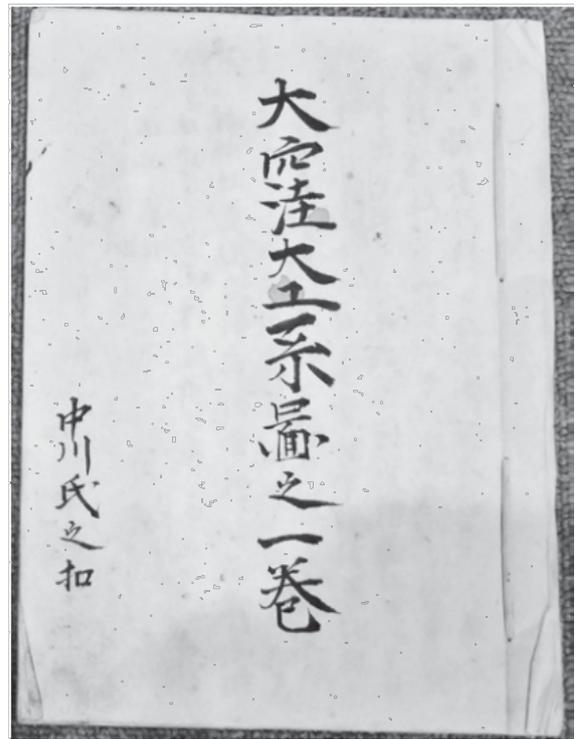


図4-20 大窪大工系圖之一卷(中川氏之控)

中川家文書を基に同家が携わった建築が氷見市立博物館の大野究氏によって示され、石川県内（能登）の作例は表4-3に載せたとおりである。いずれも建築年代は不明である。

一方、中川家第八代清蔵の次男藤吉は、父と共に本山・東本願寺（文政年間の焼失）の再建に従事した。期間は文政11年（1828）

から天保6年（1835）であったという。帰国して間もなく、金沢木町の京屋弥吉郎家（後の山本家）へ養子に入り、京屋藤吉と名乗り大工職を就いた。その後慶応3年（1867）に町方大工棟梁を仰せ付き、苗字「中川」が町奉行所から与えられた。これ以来、「中川藤吉政乗」と名乗るようになったという。

明治13年（1880）金沢東別院に提出した「履歴書」⁽⁴⁾によれば、天保8年（1837）から「東派本願寺金沢別院再建大工肝煎」を勤め、文久3年（1863）と明治8年（1875）に石川郡本吉宮（現在の白山市美川町・藤塚神社）本殿、拝殿を担っている。明治11年（1878）には、旧城内にあった尾崎神社社殿群（写真4-70）の移築工事も担当している。



写真4-69 尾崎神社社殿

中川家の近世後期において大窪村を拠点とした本家は、能登でも口能登にあたる現在の宝達志水町方面の海岸よりで活動し、先の高橋家、藤岡家とは棲み分けがある。そして、中川本家の別家となった後裔の中川政乗は、金沢を拠点に活動していたことがわかった。

第4項 大窪大工・藤林家の動向

藤林家は上述した高橋家、藤岡家、中川家と同じく二代藩主利長から居屋敷を扶持された大工のひとりで、大窪村に隣接した宇波村に居を構え、初代与十郎から第八代八左衛門まで続いたが、明治期になって断絶したとい

う。（図4-11参照）これにより本家・八左衛門に替わって分家筋にあたる藤林家初代・豊左衛門が宮大工職を継承し、以降代々豊左衛門を名乗って活動したという。なお、藤林家については氷見市立博物館小境卓治氏の研究に詳しいため能登での作事活動もこの研究成果に沿った。

建築年代が明確になっているものとして、中心地に位置する浄土真宗本願寺派大乘寺の一連の作事が該当する。本堂（明治23年、1890、写真4-70）をはじめとして鐘楼、冠木門が挙げられている。七尾市中島町の真宗大谷派蓮浄寺も挙げられているが、高橋家の作事に一連の作事として挙げられている。



写真4-70 大乘寺本堂

明治中期頃に三代藤林豊左衛門（兵吉）は、高橋家十四代重左衛門に師事した時期があることから、明治34年（1901）建築の同寺の鐘楼（写真4-71）が共作にあたりと考えられる。ちなみに本堂は大正10年（1921）建築である。建築年代が明らかではないが、羽咋市福水の浄土真宗本願寺派光宗寺本堂（写真4-72）、七尾市中島町の天満宮拝殿（所在住所不明）がある。石動山山頂の伊須流岐比古神社本殿（旧大宮）、拝殿（旧御輿堂）の名も挙げられているが、本殿は江戸初期、拝殿（写真4-73）は江戸中期の建築で共に石川県

指定文化財となっている。恐らく、藤林家は明治期以降に同神社の修繕工事に関わったものと考えられる。



写真4-71 大乘寺の鐘楼



写真4-72 光宗寺本堂



写真4-73 伊須流岐比古神社拝殿

いずれにしても大窪大工・藤林家は、能登での作事例が少ないが記録に残らなかった可能性もある。しかし、地元（氷見市）での作例は圧倒的に多く、活動の場を地元においていたことが窺い知れ、他の三家とは異なった姿勢がみられる。

大窪大工の四家における能登、加賀での動向を江戸末期から現在までの作事例を中心にみてきたが、近世初期に始まる16人の大窪大工とその子孫らは、石動山天平寺大伽藍復興という使命を帯びて一端は復興を果たした。しかし、明治初期の神仏分離政策のもとほぼ全ての院坊が破却され、以後復興されることはなかった。

石動山の復興事業と併行して、子孫らは宮大工としての研鑽を積み、伝統的建築技術の継承と向上に努めきた。その結果、明治以降の彼等の活動範囲は徐々に拡大し、富山（越中）だけではなく、能登・加賀はもちろん関西方面まで活躍の場を広げていった。それは社寺建築の作事を通して、大窪大工の力量の高さを得ていたことを示し、上質な建築文化を創出した高度な職人集団として認知されていたからである。

註

- (1)高橋家が所蔵していた未整理の大量の図面類が氷見市史編さん室に寄贈され、現在は氷見市立博物館で収蔵管理されている。
- (2)高橋家の系譜は諸説があり、後裔の寛平が伝承によると十五代目にあたるとされている。しかし、本論では宮沢孝子の論考「高橋家所蔵 建仁寺流文書と大窪大工」(『氷見春秋 第22号』1990年、p.59)による十八代目を採った。
- (3)金沢市立玉川図書館近世史料館蔵「大窪大工顕彰碑銘文写」(中村石蘭亭文庫)
- (4)迎四三雄「加賀宮大工の祖「大窪大工」に就て(一)」(『石川郷土史学会会誌 第11号』1978)

参考文献

- ・土屋敦夫編著『室木邸 中島町指定文化財調査報告書』中島町教育委員会、1990年
- ・石川県教育委員会『石動山天平寺歴史資料調査報告書』石川県、1980年
- ・石川県教育委員会『石川県の近代和風建築 石川県近代和風建築総合調査報告書』石川県、2010年
- ・氷見市寺社所蔵文化財調査委員会『平成三・四年度 氷見市寺社調査報告書 浄土真宗本願寺派の部』氷見市教育委員会、1993年
- ・氷見市寺社所蔵文化財調査委員会『平成五・六年度 氷見市寺社調査報告書 真宗大谷派の部』氷見市教育委員会、1995年
- ・氷見市寺社所蔵文化財調査委員会『平成六・七年度 氷見市寺社調査報告書 臨濟宗国泰寺派・浄土宗・日蓮宗・高野山真言宗・曹洞宗の部』氷見市教育委員会、1996年
- ・氷見市寺社所蔵文化財調査委員会『平成八・十二年度 氷見市神社調査報告書』氷見市教育委員会、2002年
- ・弘源禅寺総合調査団編『越中二上山と国泰寺 弘源禅寺総合調査予備報告書』桂書房、1994年
- ・小境卓治『弘源寺本堂図面と大窪大工 研究ノート』小境卓治、1994年
- ・氷見市史編さん委員会『氷見市史1 通史編一 古代・中世・近世』氷見市、2006年
- ・氷見市史編さん委員会『氷見市史10 資料編八 文化遺産』氷見市、2007年
- ・田中徳英『加賀藩大工の研究 建築の技術と文化』桂書房、2008年
- ・七尾市史編さん専門委員会『新修 七尾市史8 寺社編』七尾市、2008年
- ・氷見市立博物館『氷見の手仕事』2011年
- ・石川県中能登町教育委員会『平成三十年三月 中能登町能登部下 乗念寺文書目録』石川県中能登町、2018年
- ・光西寺『東旭山 光西寺誌』1972年
- ・石川郷土史学会編『石川郷土史学会会誌 第11号』石川郷土史学会、1978年
- ・能坂利雄編『歴史・文化 氷見春秋 第3号』氷見春秋社、1981年
- ・能坂利雄編『歴史・文化 氷見春秋 第4号』氷見春秋社、1982年
- ・橋本芳雄編『氷見春秋 第21号』氷見春秋社、1990年
- ・橋本芳雄編『氷見春秋 第22号』氷見春秋社、1990年
- ・氷見春秋会編『歴史・民俗・文化 氷見春秋 第60号』氷見春秋会、2009年